

第 13 回研究例会

概要

ユーラシア歴史文化研究班として第 3 回目の研究例会である。まず吉田豊研究員が、ゴビ砂漠のセヴレイで発見されたソグド語碑文を取り上げ、ウイグル可汗国が唐との境界にあたる国門に建てた石碑がそれであると報告し、さらに 8 世紀にヒンドゥークシュの南を支配したハラジュ突厥の王が発行したコインに、バクトリア語の銘文以外にソグド語銘文もあることを指摘し、その歴史的な背景も報告した。次に、池尻陽子研究員が、チベットの書簡マニュアルをいくつか取り上げ、それらにおいて敬意記号チェターがどのように説明されているかを報告した。最後に、澤井一彰研究員が、2013 年に沖縄県うるま市の勝連城跡から出土し、2016 年にその事実が公表された 10 枚の銅貨のひとつである H.1099(1688) 年付オスマン朝マングル銅貨をとりあげ、その歴史的背景をあきらかにするとともに、なぜ、オスマン朝の銅貨が勝連城跡から発見されたのか、その考えられ得る可能性についてオスマン朝社会経済史、とりわけ貨幣史の研究成果を踏まえつつ報告した。(主幹研究員／森部豊)

発表要旨

「歴史資料としてのソグド語の金石文：碑文とコインの銘文を例として」

本発表では、ゴビ砂漠のセヴレイで発見されたソグド語碑文を取り上げ、『新唐書』の「回鶻伝」に見える宰相李泌が 787 年に、当時の皇帝の徳宗に語った言葉の中で言及された、回鶻が国の門に建てた石碑がそれであると論じた。セヴレイ付近は、唐の時代「花門山」と呼ばれており、「国の門」と呼ばれるに相応しい。また現在残された碑石断片から推定される碑文は、高さ 7 メートルに達する巨石であったらしいことを示した。そしてこれを建てたのは近年中国の学者の于子軒(『唐研究』2022)が想定する第 4 代頓莫賀可汗(位 779-789)ではあり得ず、第 3 代牟羽可汗(位 759-779)の可能性が高いことを示した。別に、8 世紀にヒンドゥークシュの南を支配したハラジュ突厥の王が発行したコインに、バクトリア語の銘文以外にソグド語銘文もあることを指摘し、その歴史的な背景も議論した。(研究員／吉田 豊)

「勝連城出土の H.1099 (1688) 年付オスマン朝マングル銅貨とその歴史的背景」

本報告では、2013 年に沖縄県うるま市の勝連城跡から出土し、2016 年にその事実が公表された 10 枚の銅貨のひとつである H.1099(1688) 年付オスマン朝マングル銅貨に注目し、その歴史的背景をあきらかにするとともに、考えられ得る可能性についてオスマン朝社会経済史、とりわけ貨幣史の研究成果を踏まえつつ検討した。

具体的には、このマングル銅貨が、長引く戦役による戦費増大と、君主の代替わりに際して支払われる賞与の財源を捻出するために、それまでのアクチェ銀貨に代えて基軸通貨化を試みられた稀有な時期に発行されたものであることをあきらかにした。この銅貨は、最終

的に、アクチェ銀貨と等価での流通を強いられたために経済混乱の主因となり、約3年間という非常に短い期間で発行が停止された。しかしの間には、オスマン朝の領内だけでなくフランスにおいても大量の私鑄銭が製造され、流通したことも同時によく知られている。すなわち、勝連城跡で発見されたマングル銅貨も、こうした贋金のひとつが、フランスあるいはオランダを経由して、東アジアに到来した可能性が高いという結論に達した。(研究員／澤井一彰)

「チベットの書簡マニュアル (yig bskur rnam bzhag) における敬意記号 (che rtags) に関する記述について」

チベットの書簡マニュアルとは、適切な書簡 (yig bskur, 'phrin yig) を作成するための解説、用例集である。本報告では、チベットの主要な書簡マニュアルをいくつか取り上げ、それらにおいて敬意記号チェターがどのように説明されているかを検討した。今回取り上げた中では、チェターについての解説が明確になされているものは非常に少ない一方、敬意表現としては擡頭に関する記述がいくつかの書簡マニュアルに散見されることを確認した。(研究員／池尻陽子)